

人が関わることで守られる草地の環境

草地とは、植生が遷移する一過程で、日本の気候ではいずれは森林へと遷移していきます。しかし、人間が存在する以前から草地環境は存在しており、氾濫や野火などのような自然攪乱により、植生遷移がリセットされることで草地が成立していました（自然草地という）。その後、人間が草資源として使うようになり、刈り取りや野焼きなど人の手による攪乱が起こり、そこでもまた草地が成立してきました（半自然草地という）。そのような草地も、近年は急激に面積を減らしています。それは、ダムや河川護岸などによる氾濫の減少、草資源の価値消失による管理放棄など、遷移がリセットされる攪乱が無くなったことが一因です。また攪乱が無くなると草地は遷移が進みヤブ化し、さらに開発によっても消失します。草地に棲む草地性生物は急激に数を減らし絶滅の危機にあります。その例が、草の葉を編んで子育てをする日本最小のネズミ、カヤネズミや、ススキなどを食草とするギンイチモンジセセリなどです。

昭和30年代以前は、水口町松尾では山裾や棚田の畦に、甲南町竜法師では集落から約2kmの山上に、草を採取する茅場があったと聞きます。茅は牛の飼料や屋根材として欠かせない資源でした。そのような茅場にはカヤネズミをはじめ多くの草地性生物が生息していました。人と生物が互いに干渉することなく、しかしとても近くに暮らしていたのです。当時をよく知る人に聞くと、ワラの中にネズミがいたという話は聞いても、それが何ネズミだったのかを知る人はいません。それほど互いに益害を意識しない関係でした。しかし、ひとたび草資源の価値がなくなると、茅場は消失し生き物はいなくなり、身近な秋の七草でさえも、今では見ることが難しくなりました。しかし甲賀市内では、人が関わる草地が田畑の畦や線路沿いなどにまだ見つかります。持ち主が何も気に留めずに管理している環境に、カヤネズミの巣など草地性生物を見つけることができます。

そのような人が関わることで維持されてきた草地が、いかに生物多様性の価値が高いものだったのでしょうか。おこがましい言い方をすれば、人が無意識のうちでも、多少は生物多様性に貢献してきたのかもしれない。

中村 久美子

(滋賀県立琵琶湖博物館 主任学芸員)



カヤネズミの巣



カヤネズミ



田んぼの畦のカヤネズミの巣